

近世ロンドンの地域社会と役職制度

—聖ダNSTAN教区の事例（下）—

中 野 忠

（六）役職の構造と役職者たち

（1）ロンドンの役職制度

急速に発展を遂げるウェストエンドと接した市壁外の教区（区）聖ダNSTAN（イン・ザ・ウェスト）は、規模の点でも社会経済構造の面でも、シティの中心部やその他の教区・区とはかなり異なった特徴をもつ地域社会だった。本稿の前半（上）ではその一斑を検討してきた。後半（下）では、特に王政復古期以後の半世紀ほどの間の、この地域社会における役職制度の実態について分析を進める。

まずロンドンの役職制度について簡単に触れておこう⁶²⁾。区や教区からなるロンドンの地域社会には実にさまざまな役職があった。これらの役職は基本的に住民が無給で担当することになっており、地域社会——ひいては、ロンドンという「都市共同体」全体——が安定的に機能していくためには、これら役職担当者を円滑にリクルートすることが不可欠だった。具体的な例を挙げておこう。シティの中心部にあるバッシショウ区は1692年の人頭税でも139世帯、間借り人世帯（107）を含めても246の担税世帯しかない最も小さな区の一つだが、ここでも1655年には4名の市会議員、17人の陪審員、9名の吟味役を含め、区だけで合計50を超える役職があった⁶³⁾。

もう少し大きなキャンドルヴィク区の例をあげれば、その役人の数は年によって若干の違いはあるが、1677/78年には、第18表のような区の役職者が選ばれている⁶⁴⁾。区の役職だけで合計69ものポストがあった。1人が同じ年度に複数の役職を務めることはないわけではなかったが、担税世帯にかぎれば、3.8世帯に1世帯がこの区の役職のどれかを

62) シティ全体の役職については、中野「商人の共和国」『比較都市史研究』30巻1号（2011）、47-50ページも参照せよ。

63) GL, MS. 2505/1 (Basshishaw Wardmote Inquest Minutes 1665-1752; Spence, *op. cit.*, p. 179. ちなみにこの年の区審問集会には、間借り人を含める総世帯数の四分の一にあたる66名が出席している。

64) GL, MS. 473 (Candlewick Wardmote Inquest 1676-1802), pp. 9-13より作成。他の区の場合もほぼ同様な役職が見られる。役職者と並んで、それぞれの年度に認可された飲食業や旅館の名前も記載されるのが通例であった。区集会はこれら営業者を監督するための機会でもあった。

第 18 表 キャンドルヴィク区の役職

	役職名	人数
1	Common Councilor (市会議員)	8
2	Inquest foreman (審問陪審長)	1
3	Comptroller (会計検査役)	1
4	Treasurer (出納役)	1
5	Examiner (尋問役)	1
6	Scribe (書記役)	1
7	Assistants (補佐役)	2
8	Steward (司厨役)	2
9	Butler (執事役)	2
10	Fueller (燃料役)	1
11	Grand Jury (大陪審員)	17
12	Petty Jury (小陪審員)	19
13	Constable (治安役)	6
14	Scavenger (清掃役)	7
	合計	69

GL, MS. 473 より作成。

務に携わる役人というよりも、しだいに儀式化ないし「宴会クラブ化」したともいわれる年一度の区集会 wardmote での役職であった⁶⁷⁾。地域の住民を区の集会に動員し、地域への帰属意識を高める手段として、これらの役職がもった意義は看過できないが、かならずしも担当者が日常的に拘束されるような役職ではなかった。大陪審員、小陪審員は、区集会において市参事会員の部下として、区内での治安・衛生・度量衡・営業権などに関する違反者を区集会で訴える告発陪審員であった⁶⁸⁾。市会議員を別にすれば、区の日常生活に密接に関わる役職は、秩序維持に関わる治安役と、街路の整備やごみ処理などの都市環境の維持に関わる清掃役の二つであった⁶⁹⁾。

都市の役職には当然のことながら名誉や威信の点で上下の関係があった。市長、市参事

務めていた計算になる。地域社会の役職としては、さらにこれに教区委員 church warden、貧民監督役 overseers of the poor、救貧税徴収役など、教区の諸役が加わる。これらを考慮すれば、この地域社会でも住人のきわめて多くが役職を分担しなければ地域社会は機能しなかったことになる。

こうした地域社会の役職者の多さとその意義について開拓的研究を行なった V. パールは⁶⁵⁾、17 世紀後半には役職制度はしだいに弛緩していったが、解体してしまったわけではないことも指摘している⁶⁶⁾。もっとも、以下でも検討するように、役職には負担の軽重があり、役職の数の多さはかならずしも住民と地域社会の関わり方の強さを意味するものではなかった。第 18 表のうち、2 から 10 までの 9 職、12 人は、年間を通じて区の諸業

65) 本稿(上)、注 3、4 の文献のほか、坂巻清「近世ロンドン史研究の動向と課題—「危機」と「安定」を中心に—」『巨大都市ロンドンの勃興』所収；同「イギリス近世国家とロンドン」『立正史学』109 号(2011)、1-20 ページも見よ。ロンドン郊外の役職制度については次が詳しい。菅原秀二「イギリス革命期ウェストミンスターにおける教区の役員をめぐる—セント・マーティン・イン・ザ・フィールズ教区を中心に—」イギリス都市・農村共同体研究会編『イギリス都市史研究：都市と地域』(日本経済評論社、2004)、27-48 ページ。

66) Pearl, 'Change and stability'.

67) 区の役職については、S. & B. Webb, *English Local Government*, vol. II, Part II, *The Manor and the Borough* (London, 1908; Reprint edn., 1963), pp. 594-606.

68) リート裁判所の陪審員とは異なって、これら審問陪審員の職務は告発のみに限定され、審理に加わったり罰金刑を科したりすることはできなかった。S. & B. Webb, pp. 594-95; Anon., *An Inquiry to the Nature and Duties of the Office of Inquest Jurymen* (London, 1825).

69) その職務については、G. Meriton, *A Guide for Constables, Churchwardens, Overseers of the Poor, Surveyors of the Highway & c. Collected by Geo. Meriton* (London, 1679), pp. 218-24; [Jacob, Giles], *The Compleat Parish = Officers*, 10th edn., (London, 1744), pp. 12-97, 220-23 を見よ。

会員のような上級職の場合には、その高い地位は財産資格によって明確に規定されていた。豊かな市民の多いロンドンでは、その額は格別に高く、市参事会員でも1万ポンドの資産をもつことが就任のための条件であった⁷⁰⁾。それに比べれば地域の役職の規準ははるかに低かったが、誰でも就任できたわけではなかった。大陪審員の公式の財産資格は100マーク、小陪審員のそれは40マークとされていたし、治安役のような役職でも、相当額の財産をもつ独立した世帯主（戸主 *substantial householders*）で、「正直で体力も理解力もある」ことが要求された⁷¹⁾。ロンドンの治安役の場合には、フリーメンであることも必要だったとされる⁷²⁾。

市長を頂点とする市の役職制度と同様に、地域社会内部の役職相互のあいだにも序列はあった。それはそれぞれの役職担当者の経済的地位からも窺うことができる。次の第19表に挙げた例は、1580年代のコーンヒル区のそれぞれの役職担当者について、課税記録を用いてその経済的地位を推定した先行研究からの引用である⁷³⁾。この例では、清掃役がもっとも低い査定を受けた役職であり、小陪審員、治安役がその上に位置し、市議員が

第19表 エリザベス朝期コーンヒル区の役職の位階（課税額別）

役職名	サンプル数	査定なし	£8 以下		£9～49		£50 以上	
	N	N	N	%	N	%	N	%
Scavengers 清掃役	20	3	15	75.0	2	10.0	0	0.0
Petty jurymen 小陪審人	38	5	28	73.7	5	13.2	0	0.0
Constable 治安役	28	2	15	53.6	7	25.0	4	14.3
Wardmote inquestmen 審問人	32	2	13	43.3	8	25.0	7	21.9
Collectors for poor 救貧税徴収役	15	1	7	46.7	5	33.3	2	13.3
Church Wardens 教区委員	13	0	6	46.2	5	38.5	2	15.4
Grand jurymen 大陪審員	35	0	14	40.0	13	37.1	8	22.9
Common Councilors 市議員	6	0	0	0.0	1	16.7	5	83.3
	203	14	102		50		35	

Archer, *op. cit.* p. 65 より作成。

70) またリヴァリメンになるにも大カンパニーの場合には1000ポンド、小カンパニーでも500ポンドの財産の所有が条件として求められた。A. Pulling, *A Practical Treatise on the Laws, Customs, Usages and Regulations of the City and Port of London*, 2nd edn. (London, 1844), p. 82; Pearl, *London and Outbreak*, pp. 59–63. G. S. De Krey, *A Fractured Society: The Politics of London in the First Age of Party 1688–1715* (Oxford, 1985), pp. 10–11. 財産資格の他に、1661年の自治体法は、都市役職者に宗教上の制限を設けることになった。国王への臣従の誓約を拒否した者の例については、GL, MS. 3016/2, fol. 2.

71) 中野「行政区をめぐる一資料」、57ページ；R. G. (Robert Gardiner), *The Compleat Constable. Directing All Constables, Headboroughs, Tithing-Men, Church-Wardens, Overseers of the Poor, Surveyors of the Highways, and Scavengers, etc.* (London, 1710), p. 7; W. E. Tate, *The Parish Chest. A Study of the Records of Parochial Administration in England*, 3rd edn., (Cambridge, 1969), pp. 31–32. 少数の例ではあるが、間借り人 lodger であっても、これらの役職を担当することがありえた。中野「商人の共和国」、51ページ。

72) R. G., *op. cit.*, p. 110.

73) Archer, *op. cit.*, p. 65; GL, MS. 4071/1; 4072/1.

ランキングの頂点に立っている⁷⁴⁾。こうした役職の上下関係は区や教区ごとに違いがあったとしても⁷⁵⁾、位階的な秩序はどの地域社会にもあった。とはいえ、それが何を意味するかはこの表からは読み取れない。それが、それぞれの役職を担う異なった社会・経済的な集団が存在したことを意味するのか、それとも住民の一人一人が経験しうるライフサイクルの諸局面に対応するものなのか、あるいはこれが地域社会の位階の段階を表すとしても、その順番がどの程度厳密に守られていたのかといった問題は、現実の役職者を分析することによってしか明らかにできない⁷⁶⁾。以下では聖ダNSTAN教区の役職について、これらの点を念頭において検討を加えていく。だがその前に、地域とその役職の一般的性格について、16世紀後半以降にみられる変化を指摘しておかねばならない。

(2) 17世紀の地域と役職

一つの点は、地域社会の役人の職務や地位は、17世紀には無視できない変化が見られたことである。救貧法に関連した貧民監督役のような比較的新しい役職もあったが、多くの地域の役職は中世に起源をもち、その地位もかならずしも高いものではなかった。しかし特に16世紀後半以降、国家や王権が臣民への干渉の領域を広げるにつれて、地方の下位の役職が果たす役割は低下するよりも、むしろ一層高まることになった。そのことは何よりも、「役職に無知で不慣れな」人々のために出版された、いくつもの解説書が版を重ねたことに示されている⁷⁷⁾。その代表的な役職が治安役である。第19表からも窺われるように、治安役職は低い地位の尊敬に値しない役職とみなされ、その無責任ぶりは当時の人々の非難や軽蔑の対象であった⁷⁸⁾。現代の研究者の間でも、それが中層以上の住民からは就任を拒まれることが多く、勤務ぶりもきわめて怠慢だったとの評価が一般的であった⁷⁹⁾。しかし近年の研究は、こうした見解に対し大きな修正を加えてきた。いくつかの地域事例を詳細に検討したJ. ケントの研究は、この役職がけっしてマイナーなものではなく、その勤務ぶりも多くの場合、誠実であったことを立証している⁸⁰⁾。

74) GL, MS. 4071/1; 4072/1.

75) アーチャーもポートソーケン区についても同様な分析を試みている。Archer, *op. cit.*, p. 66.

76) この点については、F. F. Foster, *The Politics of Stability. A Portrait of the Rulers in Elizabethan London* (London, 1977), pp. 57–60.

77) 注69、71の文献のほかに例えば、John Layer, *The Office and Dutie of Constables, Church-Wardens, and Other the Overseers of The Poore: Together with the Office and Dutie of the Surveyours of the High-Wayes: Collected for the Help and Benefit of Such as Are Ignorant and Unskilfull in the Discharge and Execution of the Said Offices* (Cambridge, 1641).

78) 古典的な事例として、Ned Ward, *The London Spy* (4th edition, 1709), edited by P. Hayland (Michigan, 1993), pp. 74–77; [ネッド・ウォード [著] 『ロンドン・スパイ：都市住民の生活探訪』 渡邊孔二監訳；中村裕子 [ほか] 訳 (法政大学出版局、2000)]。

79) S. & B. Webb, *English Local Government*, vol. v. *The Parish and County* (London, 1906), pp. 15–19.

80) J. Kent, *Village Constables The English Village Constable, 1580–1642: A Social and Administrative Study* (Oxford, 1986). 地域社会 (教区) およびその役職と国家の関係についての考察は、Kent, *op. cit.*, chap. 8; do., 'The centre and the localities: State formation and parish government in England, circa

中世から存在したこの役職は、近世になると治安判事の職務と結びつき、地域の治安や福祉などに関する様々な問題に関して、それまで以上に複雑で多面的な関わりを持つようになってきた。治安役は地域で選ばれる地域の役人であると同時に、治安判事を通じて中央政府の行政の末端を担う役人という二重の性格を強くもち、その職務は叫喚追跡など犯罪の取り締まり、夜警の監視、浮浪人の処罰、不法なゲームや居酒屋の監視、カトリック教徒や不法集会の摘発などの広範な治安維持のための職務の他に、消費税徴収の補助、密輸や漁業妨害の取り締まりなど経済や財政の事案にも関わる、日常生活の実に様々な範囲に及んでいた⁸¹⁾。治安役に対する敵意や非難は一面、地域住民に日常的に接する、この役職者に課されたこうした過大とも思われる責務の裏返しだったとみることもできる。

第19表では最も下位に位置する役人である清掃役さえも、17世紀後半には地域社会の役職者としての重要性をました可能性がある。道路の清掃は通りに面した各戸の責任とされ、清掃役は日曜を除く毎日、荷馬車を所定の場所に止めてごみを収集することがその役割だった⁸²⁾。16世紀を通じて何度も疫病に襲われたロンドンでは、都市化が進展するとともに、住宅環境や交通事情の悪化、ごみ処理や公衆衛生の問題が深刻化してきた。すでに1665年のペスト大流行に先立つ1662年、ロンドンとその周辺地域の道路や下水道の管理、馬車の運行を規制する法が制定され、そのもとに国王指名の委員会が設立された⁸³⁾。この法は、下水道の新設、道路の照明、通りの命名などに関する規制も盛られた、都市環境に関わる最初の包括的な立法と呼んでよいものである。そこでは「2名以上の有能な商工業者 *able Tradesmen* から選ばれる清掃役は、住民から道路の清掃管理のための税を査定し徴収し会計報告すること」が義務付けられた⁸⁴⁾。その後もこの法を受けて、1670/71年、1690年にも、道路の舗装や清掃を保つための制定法が追加された⁸⁵⁾。道路や下水の

1640–1740', *The Historical Journal*, vol. 38–2 (1995), pp. 363–404.

81) R. G., *op. cit.*: 中野「商人の共和国」、49–50、55ページ。こうした見解の先駆的研究としては、K. Wrightson, 'Two concept of order: justices, constables and jurymen in seventeenth-century England', in J. Brewer and J. Styles, eds., *An Ungovernable People* (New Jersey, 1980), pp. 21–46.

82) R. G., *op. cit.*, pp. 91–93.

83) 14 Car. II. c. 2 (An Act for repairing the High ways and Sewers and for paving and keeping clean of the Streets in and about the Cities of London & Westminster and for reforming of Annoyance and Disorders in the Streets of and places adjacent to the said Cities and for the Regulating an Licensing of Hackney Coaches and for the enlarging of several strait & inconvenient Streets and Passages), *The Statutes of the Realm*, V, pp. 351–57.

84) *The Statutes of the Realm*, VI, p. 233; R. G., *op. cit.*, pp. 92–93. 1662年の法では、住民は四季ごとに査定を受け、支払いを拒否した者は投獄ないし財産没収という厳しい措置を受けることになった。最終的な権限は治安判事がもっていたが、税の査定や徴収は庶務役とそのため任命された役人が当たるとされ、清掃役が特別にこの職務を遂行することは明記されていない。*The Statutes of the Realm*, V, p. 356.

85) 22 & 23 Car./II, c. 17 (An Act for the better paveing and cleansing the Streets and Sewers in and about the City of London), *The Statutes of the Realm*, V, pp. 729–32, および 2 Gul. & Mar. c. 8 (An Act for Paving and Cleansing the Streets in the Cities of London and Westminster and Suburbs and Liberties thereof and Out-Parishes in the County of Middlesex and in the Borough of Southwarke and other places within the Weekly Bills of Mortality in the County of Surrey and for Regulating the Markets therein

清掃や管理は地域社会にとってますます深刻な問題となり、それに伴いこの問題に対処する役職者の役割や地位もまた重要性をましたと考えられる。聖ダンスタン教区の例でいえば、1668 年以後、貧民帳簿に週 1 ペンス以上を献金しないものは、清掃役に指名されないこととされた⁸⁶⁾。

地域社会の上層の役職者の間にも、17 世紀を通じて変化が生じたように見える。それまでロンドン市政の司令塔として統治機構の頂点を占めていた市参事会員と市参事会法廷に対して、内乱期前後から、区から選ばれる市議会議員と市議会がしだいに対抗勢力として影響力を強めてきたことである⁸⁷⁾。各区を統括する市参事会員が終身職で、しかも当該区での居住義務をもたなかったのに対し、市会議員は各区に居住し、少なくとも建前のうえでは年々区民の選挙によって選ばれる住人代表という性格をもつ役職者だった⁸⁸⁾。勢力関係のこの変化は、地域社会、およびその住人の集会や選挙を通じての行動が、ロンドン政治により現実的な関わりを持つ可能性を開いたことを意味する。排斥危機以後のウィッグとトーリの党派抗争の高まりとともに、ロンドンの市政を左右する市会議員職は、その選出にあたって政治的要因が強く働くことになった⁸⁹⁾。

もう一点は、教区と区の関係の変化である。一般に宗教改革以降、教区は行政単位としての役割を高めていくが、市壁内では区の下位単位である街区と重なる部分が多く、教区が区の役人選出等の点で、実質的に区の機能の一部を担うようになった。本稿（上）で触れたように、聖ダンスタン教区の特徴の一つは、区という行政単位の一部と教区とが重なることである。教区会と区集会はその起源にも役割にも明確な違いがあり、教区会が区の担う治安・衛生などの諸問題を直接取り上げることはなかったが、この教区の場合、構成員は同じ住民であった。1588 年から残存するこの教区の教区会議事録の内容の多くは、教会の運営、教会の座席 *pew* の配置、教区財産の管理、何よりも教区民の救済に関連したものであるが、区の役職に関する記録も掲載されている⁹⁰⁾。

mentioned), *The Statute of the Real*, VI, pp. 231–36.

86) GL, MS. 3016/2, fol. 55v (Memorandum).

87) S. & B. Webb, *op. cit.*, pp. 606–9; K. Lindley, *Popular Politics and Religion in Civil War London* (Aldershot: Hants., 1997), pp. 180–97; G. S. De Krey, *London and the Restoration 1659–1683* (Cambridge, 2005), p. 7.

88) しかし 1714 年には市議会法廷で、市会議員はその区の世帯主でなければならないが、居住期間については制限はなく、不在が続いた場合にも役職は無効とならないとされた。Pulling, *op. cit.*, p. 40.

89) ド・クレイの分類によれば、この教区を含むファリンドン外区は強固なトーリ・スペースの一つだったとされる。De Krey, *London and Restoration*, pp. 279, 284–88, 313–14.

90) 以前はギルド・ホールに所蔵されていたが、現在は区審問など他のすべての行政記録とともに LMA に集められている。区審問は GL, MS. 3018/1 (新番号 CLC/W/JB/044/MS03018/001) この移動にあたって史料のコールナンバーも全面的に変更された。新しい参照番号は基本的に LMA のホームページ (http://search.lma.gov.uk/opac_lma/index.htm) から調べることができる。筆者は新番号に変更される以前から調査を始めていたため、史料の新番号を確認する作業が必要となる。しかし旧史料番号の一部には新番号が確認できないものもある。旧番号は新番号の一部にそのまま採用されているため、史料を特定することができる。本稿では、特別の場合を除いて、史料の提示は旧番号が使用されている。

教区には、地域社会の機能単位として区よりも有利な点があった。一つには規模の問題がある。人口が増加するにつれ、区は隣人関係が現実には成立つ単位としては大きすぎるものとなった。第二に集会の開催数がある。中世には年4回あるいはそれ以上の回数開催されていた区集会は⁹¹⁾、16世紀以降は事実上、年1回しか開かれなくなっていた。これに対して、救貧法の成立以後、特に救貧行政の単位として重要性をました教区会は、複数回開催され、救貧税の分配を含めた教区運営に関する問題が実際に審議される場であった。教区会の議事録には現れないが、地域の日常的な問題は区集会よりも、教区会での集まりを通じて非公式なカタチで対処されることもあったと推定される⁹²⁾。それと関連して、教区会には集会の場所が確保されていたことも重要である。ファリンドン外区の年1度の区集会が聖セバルチャー教会で開かれるのに対して、教区会は聖ダNSTAN教会の一部にある審問室 quest house で、頻繁に開催された。救貧行政の重要性の高まりとともに、地域社会の機能的焦点はしだいに区から教区へと移っていき、それとともに地域社会についての記録は、区よりも教区会の議事録に多くが記載されるようになったのである。

(七) 聖ダNSTANの教区、区、教区会

まず教区会について検討してみよう。1630年から1700年まで70年間をとってみると、教区会あるいは教区民の一般集会は505回開催されている。その年ごとの開催数を追ってみたのが次の第4図である。全体を平均すれば7.2回だが、時期的に変動があった。内乱前の時期には年平均6回強だった教区会の開催数は、内乱期には平均10回近くにまで増える。王政復古期以後もしばらく開催の頻度は高かったが、17世紀最後の四半期には4.5回ほどに低下している⁹³⁾。

この開催数の減少傾向が教区会活動そのものの低下を物語るものであるかどうかは、グラフだけでは判断できないが、市壁内の教区と比べて住民の数がはるかに多いこの教区では、もともと教区会への参加が一部の住民に限られる封鎖的な性格をもっていた。すでに1601年、聖ダNSTAN教区は、カンタベリ大主教およびロンドン主教から25人からなる「選抜教区会 select vestry」とする権限が認められ、教区の業務は教区会の大多数による投票で行なうことが決められていた⁹⁴⁾。1664年7月には、役職者の選挙にすべての教

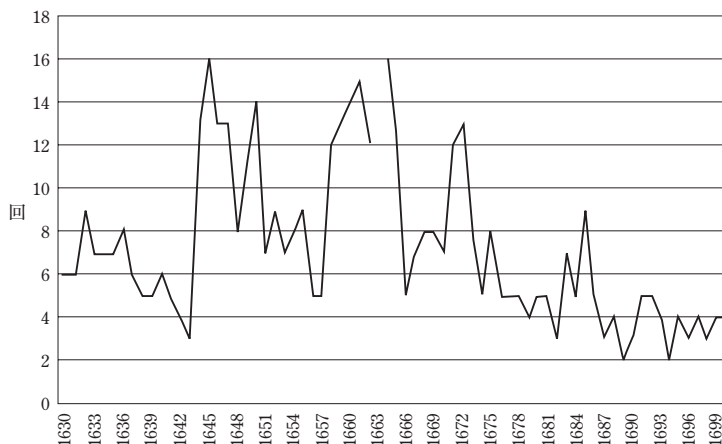
91) S. & B. Webb, *op. cit.*, pp. 596-97.

92) 区集会の役割や開催数の低下そのものが、教区会の役割の増大の結果だと言いきかもしれない。

93) 季節的には4月がもっとも多く、12月から2月にかけての冬季は少ないが、ほぼ年間を通じて開催された。

94) GL, MS. 3016/1, p. 43. この教区会の成員は教区委員、治安役、または区審問人であった。McCambell, pp. 16-17. 14人ないし24人からなるファカルティ (faculty) による教区の統治組織については、J. F. Merritt, 'Contested legitimacy and the ambiguous rise of vestries in early modern London', *Historical Journal*, vol. 54-1 (2011), pp. 29-30.

第4図 年別教区開催回数
St Dunstons 1630-1700 年



区民が招集されるべきか、それとも役職を務めたり免除金を支払ったことがあるものだけを招集するかが議論され、投票の結果、役職経験者か免除金負担経験者だけを教区役員の選挙に招集することとなった⁹⁵⁾。1670年にはさらに範囲が限定され、7月19日の教区の業務に関する問題について「次の木曜の朝9時に審問室に会合する」教区民は、「清掃役を勤務したか、それに対する（免除の）料金を払ったことがあるもの以上」とされた⁹⁶⁾。

教区にも毎年の選挙によって選ばれる役職があった。主席と副の2名の教区委員 senior and junior church wardens、貧民監督役と救貧税の徴収役各2名である。その他に教区会会員 vestrymen が選ばれたが、その数はかならずしも固定していなかった。1650年の例でいえば、教区会会員として23名の名前があげられ、そのうちの3名が市議員、2名が教区委員、4名が貧民監督役として指名されている⁹⁷⁾。1652年には25人が教区委員に任命されているが⁹⁸⁾、1661年8月の教区会では教区会員の数について討議が行われ、投票が行われた結果、その数は30とされた。それに1名の市参事会員が加わることもあった⁹⁹⁾。加えて教区委員の会計簿、および救貧税徴収役作成の会計簿の監査も行われたが、その監査には10名程度の教区民が当たった¹⁰⁰⁾。

議事録には毎回の教区会の出席者が記載されている。彼らはこの選抜教区の運営に実際に参加した人々であり、教区の役人はこれらの人々の中からリクルートされるのが通例で

95) GL, MS. 3016/2, fols. 9-9v, 12.

96) GL, MS. 3016/2, fol. 67.

97) GL, MS. 3016/1.

98) GL, MS. 3016/1, fol. 595.

99) GL, MS. 3016/1, fol. 586. 1662年には教区会員の数は市参事会員を含めて25人である。GL, MS. 3016/1, fol. 608.

100) 1660年の例。GL, MS. 3016/1, fol. 571.

第 20 表 聖ダNSTAN 教区会
出席回数

出席回数	人数	%
1	32	22.5
2～5	19	13.4
6～10	12	8.5
10～19	20	14.1
20～29	19	13.4
30～39	9	6.3
40～49	6	4.2
50～59	8	5.6
60～69	4	2.8
70～79	4	2.8
80～89	4	2.8
100～	5	3.5
	142	100.0

Vestry Minutes GL. MS. 3016/1&2

あった。1663 年から 1700 年までに限って、これらの人々の教区会への出席状況を検討してみよう。

この間、教区会は 217 回開催され、のべ 3416 人が出席した。1 回の平均出席者数は 15.7 人であり、教区会会員の数よりかなり少ない。平均すれば一人 21 回ほど出席したことになるが、各自の出席頻度はまちまちで、出席者の実数は 142 人にすぎない。出席回数ごとにこれらの人々を分類したのが次の第 20 表である¹⁰¹⁾。せいぜい 5 回しか出席しなかったものが三分の一近くいる一方で、50 回以上も出席したものは 25 人 (15%)、30 回以上でもせいぜい 40 人ほどだった。この中には教区委員ばかりでなく、市議員や教区の聖職者 (vicar, curate) など含まれている。課税対象になるだけでも 400 世帯以上も抱える大きな教区でありながら、教会管理から救済に至る多面的な教区運営

は、これら一握りの人々の手に任されていたのである。この教区の実態を踏まえたうえで、次には区の役職者について検討を加える。

(八) 区の役職者たち

(1) 区の役職

先にみたように、聖ダNSTAN 教区はファリンドン外区の一部だった。そのため、ここからは区 (ファリンドン外区) の役職者の一部だけが選出された¹⁰²⁾。1660 年を例にとれば、年々選出される区の役職者とそれぞれの人数は第 21 表の通りである¹⁰³⁾。キャンドルヴィク区の場合とは異なって、ここには儀礼的な役職名はなく、実務的な役割を担当する区の役人だけが選ばれた。ホワイト・フライヤーの治安役、清掃役と庶務役を除く全部で 41 の役職ポストが以下の考察の対象となる。

聖ダNSTAN の場合、ファリンドン外区の役人を選出する聖トマスの日に開催される区集会に 1 週間程先立って、この教区を代表する役人が予め選ばれるのが通例となっていた。区審問記録に掲載された役職者名は区集会で承認された最終的なものである。だが教区区会議事録には区審問記録にはない、それに先立つ記録が残されている。例えば、1672

101) 始点の 1663 年、終点の 1700 年の前後での出席回数は計算に入っていないから、この回数はあくまでも便宜的なものにすぎない。

102) 本稿 (上)、19-20 ページ参照せよ。

103) GL, MS. 4069/2 (Wardmote Minute Book)。

第 21 表 聖ダNSTAN区の役職

役職名	人数	飲食業者	人数
審問人 (Inquest Men)	7(14)	Cooks	8
区役人		Vintners	8
市会議員(Common Councilman)	4	Inkeepers	2
治安役 (Constable)	3	Vicualler Licensed	27
清掃役 (Scavenger)	3	Victualler Unlicensed	10
(ホワイト・フライア治安役)	2	合計	55
(ホワイト・フライア清掃役)	2		
庶務役 (Common Beadle)	2		
大陪審員 (Grand Jury)	12		
小陪審員 (Petty Jury)	12		
合計	47		

年には、聖トマスの日（21 日）の 1 週間前の 12 月 15 日、教区会で 6 名の市会議員（候補）、7 名の審問人、21 日の区審問集会では、3 人の治安役、清掃役が指名された¹⁰⁴⁾。1679 年も同様に、各 3 名の治安役、清掃役はそのまま聖トマスの区集会で承認されたが、市会議員は候補者のうちから 3 名が選ばれた¹⁰⁵⁾。区集会は市会議員の選出に関しては重要な判断の場であったのである。

以下では区の審問記録から、17 世紀後半を中心に、聖ダNSTAN街区（教区）の役職の就任状況と役職者を分析してみることにしよう¹⁰⁶⁾。

(2) 区の役職と位階

これら聖ダNSTAN教区のそれぞれの役職にはどのような位階があり、担当した住民はどのような社会層の人々であったろうか。それを明らかにする手掛かりは課税の記録であるが、(上)で触れた通り、この教区の課税記録のうち、職業が記されているのは 1660 年のものしかない。以下でもこの課税記録が用いられる。

まず役職と経済的地位との関連を調べてみよう。この課税時をはさむ前後 5 年間の 1656 年から 1665 年までの 10 年間、小陪審員、大陪審員、清掃役、治安役、審問人役、市会議員という区選出の役人、および下級・上級の教区委員を 1 回でも務めたことがある住人は 189 人いた。そのうち、160 人については、1660 年の課税記録で査定額が確認できる。第 19 表にならって、それぞれの役職者の査定額を分類してみたのが、次の第 22 表である¹⁰⁷⁾。

104) GL, MS. 3016/2, fols. 119–20v.

105) GL, MS. 3016/2, fol. 137v.

106) GL, MS. 3018/1 (新番号 CLC/W/JB/044/MS03018/001: St Dunstan in the West Precinct: register of presentments of the wardmote inquest).

107) 名前の同定に伴う問題については、後述、注 117 を参照せよ。

第22表 課税額と役職

課税額	小陪審員		大陪審員		審問人		清掃役		治安役		市会議員		副教区委員		教区委員	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
9s. 以下	32	78	20	50	1	4	2	7.7	1	6.7	0	0	0	0	1	20
10～19	4	9.8	4	10	5	20	5	19.2	5	33.3	0	0	0	0	1	20
20～59	3	7.3	6	15	9	36	7	26.9	4	26.7	2	50	2	50	1	20
60～	2	4.9	10	25	10	40	12	46.2	5	33.3	2	50	2	50	2	40
合計人数	41	100	40	100	25	100	26	100	15	100	4	100	4	100	5	100
平均(s.)	7.6		24.3		43.4		40.2		28.9		65		34.6		30.6	

表中の下段には、それぞれの役職者の査定額の平均値が示されている。サンプルが少なすぎることはおくとしても、この表はエリザベス朝期のコーンヒル区の例とはやや異なった点が見られる。当然ながら、ここでも最も査定額が高いのは市会議員で、10 シリング以下の担税者もない。注目すべき相違点は、コーンヒル区で最も低い査定グループである清掃役が、17 世紀後半のこの区では比較的高い平均額を示していることである。この時期のこの区では、清掃役は最下層の役職ではなかった。先に見たように、この役職を務めることは教区会に出席できる条件であったし、それにはいくばくかの名誉を伴うことさえあった。1661 年 8 月の教区会では、選挙で清掃役に選ばれながら、その役職への就任を辞退したり免除金を支払って役職にともなう通常の義務を果たそうとしない者は、当人とその妻が教会の座席の点で尊敬や優遇を受けるに値するとはみなされないものとする、という決定がなされている¹⁰⁸⁾。課税の平均額で見ると、この区で経済的に低いランクの住民が引き受けたのは、コーンヒル区では比較的豊かなグループである小陪審員、大陪審員だった。

ではどんな職業の住民がこの地域の役職を担ったのだろうか。189 人の区の役職者のうち、1660 年の課税簿で職業名が確認できるのは半数の 94 人だけである¹⁰⁹⁾。それを分類してみたのが次の第 23 表である。

教区簿冊で確認されるようなジェントリや法律家などは、役職者のなかには一人も見いだせない。富裕層が多く、この地域の経済社会構造に際立った特徴を与えていたこれらの階層の人々は、地域の役職にはほとんど関わりをもたなかったのであり、結局、その担い手となったのは、彼らよりは下の階層に属する商工業者だった。第 23 表の職業分布は、(上)の第 3 表の課税記録の職業構成とほぼ一致する。これら職業名のわかる役職者の査定額は、最低限の 1 シリングから 200 シリングまでと大きな幅があり、職業の面でも目立った偏りは見られない。ジェントリや専門職階層を除けば、役職制度にはかなり広範な社

108) GL, MS. 3016/1, p. 587v.

109) 役職者の全員の職業が書かれている例はほとんどないが、珍しい例として、1732 年以降のクリップルゲイト区がある。この地域の経済的性格を反映して、チーズ商人などの食料・飲食業者が多くを占め、聖ダNSTAN 区の例とは著しい違いがみられる。GL, MS. 6042/1.

第 23 表 役職者の職業 1656-1665 年

職業名	人数	%	2 名以下の職業	
Merchantaylor	10	10.6	Goldsmith, Musitian, Scrivener, Bookseller, Clockmaker, Skinner, Limmer Waterman, Fishmonger, Waxchandler, Joiner, Whitebaker, Fishmonger, Joiner, Cooper, Painter stayner of the Livery Tallowchandler of the Livery	
Barber Chirurgeon	9	9.6		
Sadler	8	8.5		
Stationer	6	6.4		
Cordwainer	5	5.3		
Cutler	5	5.3	32 種	94 人
Haberdasher	4	4.3	平均査定額	24.5 s.
Apothecary	3	3.2	最高額	200 s.
Blacksmith	3	3.2	最低額	1 s.
Cloth-worker	3	3.2		
Cooke	3	3.2		
Draper	3	3.2		
Girdler	3	3.2		
Grocer	3	3.2		
Leather-seller	3	3.2		
Vintner	3	3.2		

第 24 表 教区会出席者の職業

職業名	人数	1 名の職業		
Stationer	4	Armorer	Cutler	Leatherseller
Barber Chirurgeon	2	Clockmaker	Embroyderer	Mason
Goldsmith	2	Clothworker	Grocer	Skinner
Merchanttaylor	2	Cooke	Haberdasher	
Sadler	2	Cordwainer	Inholder	
Tallow chandler	2			

会層が関わっていたといえる。

同様なチェックをこの時期の教区会の出席者について行なってみよう。1660 年の課税で職業名と査定額が照合できるのは 27 名いる。第 24 表はその職業分布を示している。彼らの中には教区委員や市会議員が含まれており、査定額の平均は 63.4 シリングに達し、区の役職者全員の平均額を大幅に上回っている。しかし最低額の 1 シリングしか課税されていないものも 2 名おり、教区会会員が区の役職者よりも平均すれば地域社会のペッキング・オーダーの上位を占める人々からなっていたとしても、教区の指導者たちもまた、区の役職者と同様、経済的にも職業的にも幅広い層から調達されたといえる。

(3) 就任状況

では個々の住民は区の役職にどの程度深く関わったのだろうか。1650 年から 1700 年までの間にいずれかの役職に就任したことがある全住民 815 人（不明を除く）について、役

第 25 表 聖ダNSTAN 区の役職就任状況 1650-1700 年 (回数別)

a. 就任回数	b. 人数	%	役職占有度	
			a×b	%
1	245	52.2	245	20.1
2	73	15.6	146	12.0
3	38	8.1	114	9.4
4	37	7.9	148	12.2
5	23	4.9	115	9.4
6	22	4.7	132	10.8
7	7	1.5	49	4.0
8	5	1.1	40	3.3
9	5	1.1	45	3.7
10	1	0.2	10	0.8
>11	13	2.8	174	14.3
合計	469	100.0	1218	100.0

1660-1690 年に最初の役職に就任した者

職の種類にかかわらず、就任経験回数だけで分類したものが次の第 25 表である。

区の役職を 1 回だけ経験したものが半数以上占めていることから明らかに、教区会の場合と同様¹¹⁰⁾、役職に就いた者でもその 8 割近くの住民はせいぜい 2、3 回務める程度で、それ以上深く区の行政に関わることはなかった。6 回以上役職を務めた者は 84 人、役職経験者全体の 11% を占めるにすぎない。表中の「役職占有度」とは、それぞれのグループがこの時期の役職数全体のどれだけの部分を占めていたか

を示している¹¹¹⁾。人数では 11% を占めるだけの少数集団は、この時期の役職数の 34% を占めていたことになる。

もちろん、これはそれぞれの役職担当者の数を無視した大まかな議論である。これをもう少し詳しく、役職ごとにみたのが次の第 26 表である。先の第 22 表とあわせてみれば、この区の役職の位階順位が推定できる。一番門戸の広い役職は小陪審員と大陪審員であり、上に行くほど門戸は狭くなる。この表からいえば、まず小陪審員からスタートし、やがて審問人役、清掃役、治安役を経て、やがて区の選挙で選ばれる最高位である市議員にのぼりつめる、という位階の順位を予測させる。

しかし個々の役職者の経歴を調べてみると、こうしたケースは例外だったことがわかる。役職経験者の圧倒的に多くが関わったのは、役職者の人数も多い小陪審員や大陪審員としてであった。だが (C) 欄が示すように、彼らのうちのほぼ 70% はこの役職だけを務め、他の役職に関わることがなかった。(B) 欄が示唆するように、現実には役職は第 22 表の示唆するような順序にしたがって担当されたわけではなかった。例えば、大陪審員のなかには、小陪審員を飛ばしてこの役職に就いたものもいたし、治安役のなかにも、陪審員や審問人役を経ないでこの役職についたものもいた。幾つかその実例を示してみよう。

1650 年に小陪審員となった Edward Guillingman は、その後、55 年まで 6 年連続してこの役職を務め、さらに 60 年と 61 年にも同じ役職についている。1650 年以前の経歴を無

110) この場合も、注 101 にあるように、回数は便宜的なものでしかない。

111) この時期、41 の役職はこの 50 年間で 2050 回の役職就任の機会を提供したことになる。このうち、判読不可能なものなど不明なものを除くと、実際に就任が確認される役職数は 1218 だけである。

第 26 表 聖ダNSTAN区の役職就任者数

役職名	(a)	(b)	(c)
	人	うちこの職のみの経験者	(b)/(a)
小陪審員／大陪審員経験者	788	567	69.6
清掃役経験者	153	18	2.2
治安役経験者	139	3	0.4
審問人経験者	201	18	2.2
市会議員経験者	30	5	0.6
合計	1311	611	75.0

視するとしても、彼は 1661 年までの 12 年間に 8 回もこの役職に就いているが、それ以外の役職はいっさい務めなかった。Hugh Hall も 1653 年から 61 年までの間に小陪審員を 5 回務めたが、それ以外の役職に就くことはなかった。John Beardwell は 1659 年に小陪審員を経験しないで大陪審員に就任したが、それから 1671 年までの 14 年間に、1666 年の大火後も含めて 11 回、ほとんど毎年のようにこの役職を務めた。彼もこれ以外の役職に就くことはなかった。

Nathaniel Weekes は 1686 年から 1690 年までに 4 回小陪審員を務めた後、1691 年には大陪審員となり、1695 年から少なくとも 1700 年まで連続してその役職に就いた。この例が示すように、小陪審員がまず最初の役職で大陪審員はその後に経験する例が多かったが、二つの役職の前後関係は厳密なものではなかった。大陪審員を務めた後に小陪審を務めるケースもしばしば見られた。Thomas Vaughan は 1652 年から 58 年までに小陪審員を務めた後、1659 年から 1664 年まで連年で大陪審員と小陪審員を交互に務めている。この 13 年間のうち、彼がこのいずれかの職に就かなかったのは 2 年だけだったが、彼もこれ以外の役職を務めることはなかった。

審問人役も人数が多い点では門戸の広い役職だった。しかし陪審員と異なって、この役職だけを経験するものは比較的少数で、彼らの多くはその他の役職をも務めるのがむしろふつうだった。審問人役を務めたものは 201 人いるが、そのうちの 74 人は小陪審員も大陪審員も経験しないでこの役職についた。陪審員の務めた経験のある残りの 127 人のうち、審問人役を果たした後に陪審員を務めたのは 6 人だけだった。陪審員と審問人以上の役職グループにはかなり明確な一線があった。陪審員は、年齢と経験に応じて昇進していく位階順位の最初のポストであるよりも、あまり富裕でない、ある特定のグループの住民が担当することのできる役職だった可能性が高い¹¹²⁾。

112) ウェブの引用する 18、19 世紀の陪審員についての記事は極めて辛辣である。「陪審員は違反摘発を恐れる小売店主らを食い物にしては公式の機会を飲み食いの場とし、市参事会や市会議員の便利なボディガード役を演じている。」S. & B. Webb, *op. cit.*, pp. 600–601.

清掃役と治安役もまた多くの住民が経験した役職だったが、この役職だけで終わる者は比較的少なかった。16世紀と比べてその役割も社会的評価も高まったと思われるこの二つの役職は、役職の位階秩序の重要な一段階を占めていた。もう一つの特徴は、この二つの役職を2度以上にわたって務めるケースがほとんどないことである。陪審員や審問人役が複数回にわたって経験される例が少ないのとは対照的である¹¹³⁾。

以上の役職とは異なって、市議員に就任する者の数はきわめて限られていた。50年の間に4人からなるこのポストの一つに就いた者は30人しかいない。市議員は年々の選挙により選ばれることになっていたが、実際には複数年または何年か連続してこの役職を務める者もいたからである。しかしそれが通例というわけではなかった。

市議員を就任年数別に分類した次の第27表は、三分の一は1年だけ、9年以上もこの職にあったものは20%ほどだったことを明らかにする。市議員になる以前に務めた地域の役職の数を示す次の第28表によれば、各種の下級役職を6回以上経験して市議員になったものは3人しかいなかったのになし、三分の一は一度も下位の役職を経験することなく市議員職に就いた。同じ地域の下位の役職で経験を重ねて市議員に上昇していくというコースを辿る住人は、この時期の聖ダンスタン教区ではむしろ例外的な存在だった。

第27表 市議員の就任年数

年数	人数	%
1年	9	30.0
2～4年	9	30.0
5～8年	6	20.0
9年以上	6	20.0
合計	30	100.0

第28表 市議員以外の役職経験数

回数	人数	%
経験なし	10	33.3
1回	8	26.7
2～5回	9	30.0
6回以上	3	10.0
合計	30	100.0

市議員はロンドンでの経歴の終着点ではなかった。聖ダンスタン教区の市議員のなかにも、その後も上昇を重ね、市参事会員、さらにそれ以上の地位に上り詰めるものもいた。その一人、金匠のFrancis Childは1680年代に2度、この教区の市議員を務めた後、ファリンドン外区の市参事会員となり、やがてシェリフ、市長、国会議員にまで昇進し、ナイトに叙せられた¹¹⁴⁾。同じころこの教区の市議会議員に就任した金匠のThomas Fowleは、やがてファリンドン外区ではなく、クリップルゲイト区、その後はヴィントリ区の市参事会員となり、さらに生まれ故郷ディバイザス市のトーリ派国会議員として活動した¹¹⁵⁾。二つの例が示唆するように、市議員の地位に上昇した成功者には、地域社会を超えた世界が広がっていたのである¹¹⁶⁾。

113) Fosterの分析によれば、16世紀後半の聖ダンスタン区では、清掃役も治安役も連続して数回務められるのがむしろ通例であった。二つの役職就任が1回だけとなるのは、その地位の負担が重くなった事実を反映しているかもしれない。Cf. Foster, *op. cit.*, p. 56; 坂巻清「イギリス近世国家とロンドン」、7ページ。

114) A. G. Beaven, *The Aldermen of the City of London*, 2 vols. (London, 1908), vol. 1, pp. 134, 259, vol. 2, pp. 111, 115; J. R. Woodhead, *The Rulers of London 1660–1689* (London, 1965), pp. 72–73.

115) Beaven, *op. cit.*, vol. 1, pp. 134, 213–14, vol. 2, p. 117; Woodhead, *op. cit.*, pp. 72–73.

第29表 役職の就任期間 1650-1700年

就任期間 *	人数	%
0年=1回(1年)のみ	247	52.7
1~5年	107	22.8
6~10年	59	12.6
11~15年	32	6.8
16~20年	16	3.4
20年以上	8	1.7
合計	469	100.0

* 1660-1690年に最初の役職に就いた者の役職についた最初の年から最後の年までの期間

** うち、7人は1年に2職兼任

ぬ部分が、次の役職に就く前に、別の教区に転出していったのであり、役職の階梯を順次に経上がるだけの期間、この教区に定着する住民自体が、相対的に少数派だったのである¹¹⁸⁾。

最後に教区と区の役職の関連について、もう少し具体的な例をあげておこう。次の第30表は、区を代表する市議員と、教区会の常連(20回以上の出席者)をピックアップし、それぞれの役職経験を分類してみたものである。この表は、17世紀後半における地域の住民と役職制度の関わりかたの多様性を明らかにしている。一方の極には、少数ながら番号9、24、27の例のように、この区の下位役職を務め、教区会にも頻繁に出席し、教区委員も務めた後に市議員になるという、この地域社会の位階を確実に上昇する住民もいた。他方の極には、8の例のように、頻繁に区の役職を務め教区会に出席しながら、上位の役職には就かなかった住人もいた。あるいは、14、18、26の例のように、教区会の運営には密接に携わりながら区の役職は務めなかったもの、反対に17、19、23の例のように、その逆の関わり方をした住民もいた。こうした多様性は、役職の順位や役職に対す

役職の階梯を登るにはそれだけの期間を要する。果たして役職者はどれくらいの期間にわたって地域の役職に関わりをもったのだろうか。次の第29表は、役職の種類にかかわらず、最初に就任した時期から最終年までの期間の長さに応じて分類したものである¹¹⁷⁾。1660年から90年までの間に初めてこの地域のなんらかの役職についたもの247人のうち、10年以上にわたってこの地域の役職と関わりをもったものはせいぜい10%程度にすぎなかった。この期間の短さは、なによりも住民の移動の頻繁さと関係があったと思われる。役職を務めた住民の少なから

116) この二人の出世を可能にしたのは、金匠、銀行家としての成功だった。2人の興味深いキャリアについては、*ODNB*に詳しい。

117) 名前だけから同一と判断することは、長い期間にわたる場合には特に注意が必要である。平凡な姓名のものについては、親子である可能性もまったく別の人物である可能性もあり、同定は特にむずかしい。陪審員職とその他の役職の間に一線があるとすれば、その間の就任年に大きな開きがある場合には、別人であるとみなすほうが無難だろう。例えば、Thomas Smithなる人物が1664、1665年に小陪審員、大陪審員に就任している。同じThomas Smithはそれから11年後の1676年に清掃役職に就き、以後1685年まで、治安役職と2回の審問人職に就いている。もし同一人物だとすれば、彼は21年間にもわたってこの教区の役職に関わっていたことになる。しかし陪審員から清掃役までに11年もの間隔があり、しかもその間に1666年の大火があることを考えればなおさら、二つが同一人物であった可能性は小さい。1650年に大陪審員、54年、56年に治安役、清掃役を務めたJames Smithと、1678年から88年まで審問人役、教区委員を務めたJames Smithは別人と考えたほうが妥当だろう。本稿の表はすべて、陪審員職とそれ以外の職の就任の時期に10年以上のずれがある場合を除くなどの調整を図って作成されたものである。

118) 本稿(上)、37-42ページを参照せよ。

第 30 表 市議会、教区会、区役職

	氏名	市会議員	教区委員	教区会出席回数	区役職経験数
1	Francis Child	*		5	0
2	Thomas Fowle	*		23	1
3	Alyn Reade	*		86	0
4	Henry Reade	*		0	0
5	Robert Reddway (Redway)	*		52	11
6	John Reynods	*		23	5
7	Giles Rodway		*	52	1
8	Abell Roper		*	63	7
9	John Saunders	*	*	114	4
10	Thomas Savage	*		55	2
11	Hurd Smith			55	11
12	John Smith		*	6	6
13	John Somer (s)	*		0	2
14	William Spire			29	0
15	William Stamper		*	26	2
16	John Starkey	*		0	0
17	Joseph Stowe			0	12
18	Richard Tailor	*		27	0
19	Thomas Vaughan			0	11
20	Nicholas Waite		*	36	2
21	Joseph Walbanke		*	43	3
22	Anthony Webb	*		14	2
23	Nathaniel Weekes			0	11
24	John Wells	*	*	27	9
25	Joseph Wilson		*	22	5
26	Jphn Wise			42	0
27	William Wotton	*	*	112	5

る地域住民の共通の義務感が薄れ、その関わり方が個人的なものになっていたことを物語るのだろうか。そもそも住民は地域の役職をどのように受け止めていたのだろうか。その一端を窺うことのできる証拠を次に吟味してみよう。

(九) 役職指名と役職忌避

(1) 役職と科料

選ばれた住人はだれもが役職を引き受けたわけではなかった。様々な理由から就任を辞退する者も少なからずいた。それが判明するのは、決定された次年度の役職者を記録した区審問記録ではなく、それに先立つ街区（ないし教区）の記録である。役職の辞退は区の

集会に推薦される前の街区集会または教区会の段階で生じるのがふつうだったからである。この時期の街区そのものの記録が残されている例は限られており、教区の記録（議事録）のなかに街区の役職について触れられているケースがほとんどである¹¹⁹⁾。聖ダNSTANの教区会議事録が興味深いのは、特にこの部分である。以下では煩をいわず、具体的事例をあげてみよう¹²⁰⁾。

役職に選ばれたものが免除を認められるためには、教区会に申請し、その判断を待たねばならなかった。だが免除は常に認められるとは限らなかった。1659年、Edward Richardが願い出た治安役の免除は投票の結果、否決された¹²¹⁾。同じく、1673年、徴収役に選ばれたJoseph WalbankeとRichard Gwynneは教区会に出席して免除を申し出たが、投票の結果、否決され、次の年度のこの役職を遂行することになった¹²²⁾。

免除を受けるにあたっては、たいてい科料 fine（事実上の免除金）の支払いが求められた。科料支払いによる役職の免除の例は、市長や市参事会員など都市の上級職に関しては中世以来、ロンドンでも地方都市でも広く見られたが¹²³⁾、ロンドンには少なくとも16世紀後半にはその慣行が下級の役職にまで広がっており、17世紀になると、一定額の金銭を支払って役職を免除することは、ほとんどの教区や区で慣例として確立していた¹²⁴⁾。

いくらが妥当な科料額であるかは、免除を願い出た本人の事情により異なり、判断は教区会に委ねられた¹²⁵⁾。次がその例である。

1663年10月19日の教区会。John Wiseは以前の選挙で選ばれたミドル街区の清掃役の職を、教区委員を除くその他の職も、様々な妥当な理由により免除されたいと願い出た。教区会では16ポンド、20ポンド、24ポンドのいずれが適当か投票され、決定額が速やかに教区委員に支払われた¹²⁶⁾。

119) 例えば、最も興味深い例として、GL, MS. 4426 (St Christopher le Stock)。

120) この問題についての最も詳細な研究は、ロンドンの事例を検討した次の文献である。A. M. Dingle, *The Role of the Household in Early Stuart London, c. 1603–c. 1630* (MA Thesis for the University of London, 1974), chap. 3. 菅原秀二、前掲稿：中野「商人の共和国」、57–59ページも参照せよ。

121) GL, MS. 3016/1, p. 559.

122) GL, MS. 3016/2, fol. 100.

123) 科金の徴収は、本来は非合法的な行為であった。S. & B. Webb, *op. cit.*, p. 590. ロンドン市政について19世紀前半に包括的な解説書を著わしたプリングは、次のように要約する。「あらゆる条例の試金石は、それが共通の利益 common benefitであるかどうかという点である。したがって市会に出席しないこと、市長職、市参事会職、シェリフ職を受け入れないこと、市会議員の役職を辞退すること、に対して、科金を科す条例を作ることができる。コーポレーションはそのメンバーに市の制度を強制する権限をもつ。」Pulling, *op. cit.*, p. 44. 地方都市の例については次のような文献を参照せよ。C. Phythian-Adams, *Desolation of a City. Coventry and the Urban Crisis of the Late Middle Ages* (Cambridge, 1979), pp. 47–48, 250–521; C. I. Hammer, 'Anatomy of an oligarchy: the Oxford town council in the fifteenth and sixteenth centuries, *Journal of British Studies*, vol. 18–1 (1978), pp. 1–27.

124) 免除に関しても制限が設けられることもあり、聖オレーヴ、ジュリイ教区では、清掃役の免除は2年目までは罰金で許されるが、3年目には務めねばならないとの決まりがあった。Dingle, *op. cit.*, p. 127.

125) 市参事会員やシェリフ職のような上級職の場合、その罰金の額は数百ポンドに及び、都市財政の重要な収入源の一つともなった。中野「商人の共和国」、53–55ページを見よ。

第31表 役職と科料額
(最頻値)

免除される役職	罰金額 (£)
審問人	2
清掃役	4
徴収役	4
監督役	4
教区委員	8
治安役	12
全役職	20

事情によっては、辞退が承認されるだけでなく、科料も免除されることがあった。判断は機械的になされるのではなく、教区会の意思に委ねられていたのである。しかし「慣例に従った」額が支払われるのが最も普通のやり方だった。次の第31表はそれぞれの役職の科料の最頻値を掲載したものである。この額は役職の位階とかならずしも一致しない。むしろ忌避の多いもののほど高額に設定されているように見える。

その額は市参事会員の免除の例と比べれば比較にならないほど少額であり、富裕な商人層には大きな負担にはならない金額だった。先に引用した Thomas Fowle のような豊かな住民なら、清掃役に科される通常の科料額 8 ポンドを超えて 12 ポンド支払い、さらに近隣の人々の供給のためにと 1 ギニーを贈ることもできた¹²⁷⁾。だが中小以下の商工業者にとってはかならずしも容易に支払える額ではなかったと思われる¹²⁸⁾。特に教区委員や治安役職の場合には、役職を引き受けるか科料を支払うかは、中層以上の住民にだけ許された選択肢だったことになる。徴収された科料は教区委員が受け取り、会計簿に繰りこまれて救貧など教区の運営・行政のための費用に充てられた¹²⁹⁾。

(2) 役職忌避の時期的変化

以下では 1660 年から 1700 年までの間に役職を忌避した者に焦点を合わせて、その詳細を検討してみよう。役職の種類に関わらず、教区会議事録から見るかぎり、この 40 年間に役職に選ばれながら就任を辞退した例は 201 件を数える。次の第 5 図はその変動を年毎に追ったグラフである。平均すると 1 年に 4.9 人ほどが役職を辞退した。同じ聖ダンスタン教区の 1603 年からの 30 年ほどについて、同様な役職忌避を調査した研究によれば、平均して年間 2.5 世帯が免除のための科料を支払ったとされるから¹³⁰⁾、それと比較すれば

126) GL, MS. 3016/1, p. 634.

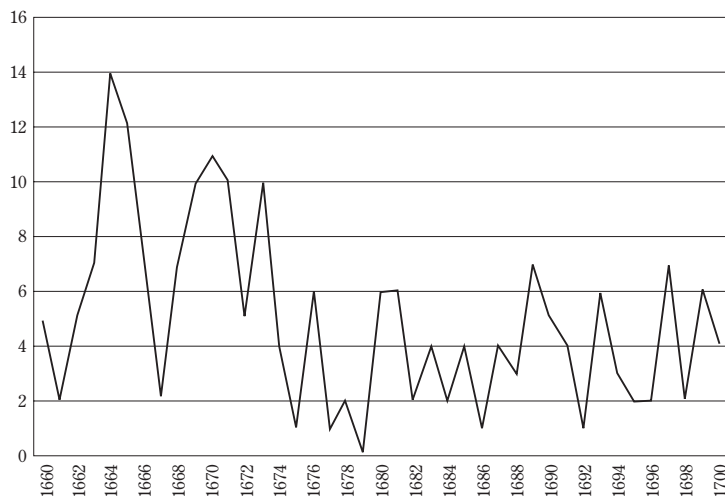
127) GL, MS. 3016/1.

128) ちなみに、グレゴリー・キングの推計によれば、小売店主や国内商人、職人の 1 世帯当りの年収は 40～45 ポンド程度だった。P. マサイアス 著；小松芳喬 監訳『最初の工業国家：イギリス経済史 1700-1914 年』（日本評論社、1988）。

129) 例えば、1685 年には 8 人もの役職免除者がそれぞれ 20 ポンド、合計 180 ポンドの罰金を支払った。その額は教区委員会計簿の罰金 Fine の部分に記録されている。GL, MS. 2968/6, fol. 71v. 役職免除金は 18 世紀初めには教区委員会計簿に収入の一部として記載された。Anon., *An Historical Account of the Constitution of the Vestry of the Parish of St Dunstan's in the West* (London, 1714), p. 12. したがって、市参事会職など上級役職の罰金の例に見られるのと同様、地域の役職に関しても、教会の修繕など、地域の財政的事情を配慮して罰金が支払われる場合もあった。Dingle, *op. cit.*, pp. 116-17, 125-26.

130) Dingle, *op. cit.*, pp. 128-29.

第5図 役職拒否件数 聖ダNSTAN教区



17世紀後半には忌避の傾向は強まったといえる。その増加の一部は、1665年のベストや1666年の大火などの、緊急事態の結果であった。聖ダNSTAN教区は教区教会を含めて広い部分は焼失をかううじて免れたが、それでも被害を被った住人は多数おり、それが役職忌避の理由とされた。次のような事例がそれにあたる。

1666年10月9日、副教区委員を務めていた William Dudley は先の9月に起こった悲しむべき大火の後、教区を見捨てて去って行った。その代わりに Mr. Robert Rodway が復活祭までの残りの任期を務めるべく選ばれた¹³¹⁾。

1670年12月17日、治安役職に選ばれた Mr. William Gerey は先の大火によってフェッター・レーンの家から退去し、同じ通りの新しい家に入っているが、去年のミカエル祭の時期以降、多額の礼金を支払わねばならず、大火からも大きな被害を被った。したがって今回はこの治安役職を免除されることが適当であるとの判断が教区会で下された¹³²⁾。

大火の非常事態は、次のような例外的措置を生むこともあった。

治安役に選ばれた Mr. Francis Lant は病弱なために12ポンドを教区委員に支払って役職を免除された。しかし1668年4月21日、教区会に来て次のような要望をした。先の大火で多大な被害を受けた。また治安役職を一時的に務めたことがある。したがって科料の一部を返金してもらいたい。教区会は事情を考慮して、5ポンドが彼に返却されることになった¹³³⁾。

131) GL, MS. 3016/2, fol. 52.

132) GL, MS. 3016/2, fol. 71v.

133) GL, MS. 3016/2, fol. 48. 別の例として、MS. 3016/2, fols. 55, 75 も見よ。

17世紀前半の平均と比べれば、例外的な時期を除いても、役職辞退は増える傾向にあったようにみえる。しかし前出、第21表に示したように、年々選ばれる区の役職には47人分のポストがあり、それに教区の役人も30人ほどいたから、1年に80人弱が役職者に選ばれたはずである。それからすれば、平均4.9件とはその6%程度でしかないから、数のうえからみればかならずしも多いとはいえない。とはいえ、詳細に検討してみると、この数値は地域社会の統治にとって、かならずしも無視しうるものではなかったことが明らかになる。

どのような役職が忌避されたかを分類してみたのが、次の第32表である。現代の研究も指摘するように、最も忌避の多い役職は治安役であり、二回目の選出のために就任を辞退したものを含めれば全部で50人、選ばれたものの40%ほどが就任を辞退している。区の役職としては、清掃役もこれに次いで忌避者の多い役職だった。教区の役職では、教区会を仕切る教区委員もしばしば忌避された役職だった。教区委員はステイタスの高い役職とみられており、すべての区の役職が免除される場合でも、以下の例に見られるように、「教区委員までの役職」だけが免除されるのが通例だった¹³⁴⁾。それでも、選出されたものの37.8%が選ばれながら就任の辞退を申し出た。

これに対して、まったく辞退の例が見られない役職もある。大陪審員、小陪審員の役職がそれである。役職ごとに辞退の例が違う大きな理由は、その役職が科す、肉体的労力も含めた様々な面での負担の多寡にあったと考えられる。

(一〇) 役職と近隣社会—忌避の理由—

役職免除を望むものはどのような理由からそれを求めたのだろうか。すべてのケースについて、辞退の理由が明言されているわけではないが、109件については、申請者が提示した辞退理由が書かれている。それを整理してみたのが次の第6図である。ここには、地域社会に対する住民の関わり方を垣間見させる貴重な証言がある。以下ではそれらの事例をあげていこう。

(1) 病気・高齢

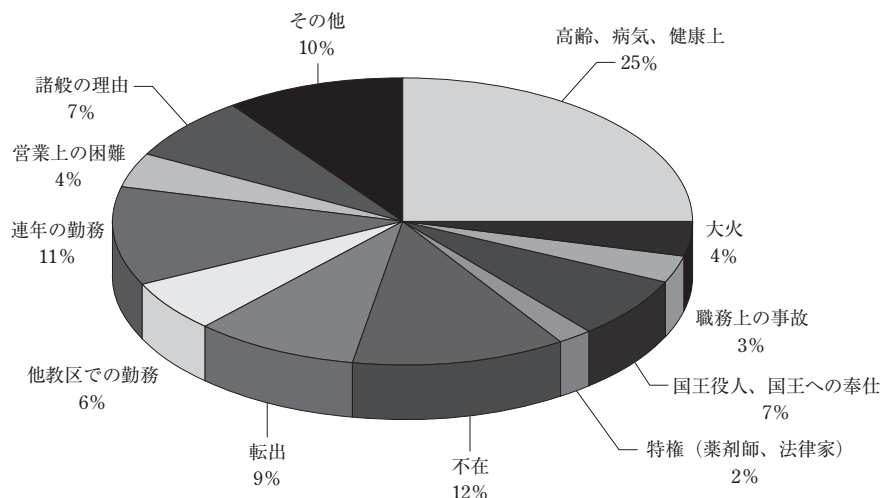
最も普通理由は、次の例のような高齢や病気、病弱などの身体的理由である。

第32表 免除申請された役職数

役職	数	%
治安役	35	17.2
教区委員(主、副)	31	15.3
すべての役職*	29	14.3
清掃役	24	11.8
救貧税徴収役	18	8.9
審問人役	15	7.4
教区会員	8	3.9
治安役(2期目)	13	6.4
その他	8	3.9
不明	22	10.8
合計	203	100.0

134) GL, MS. 3016/1, p. 595, 597.

第6図 役職忌避理由（不明除く）N=109



1662年11月6日教区会。第五審問人と治安役職に選ばれた Mr. Grice は、教区会に出席して次のことを要求した。痛風その他の不調に日々悩まされており、妥当な額の免除金でこの役職および他の教区役職を含めて免除してもらいたい。22 ポンド、16 ポンド、14 ポンドの3案が提示され、投票の結果、14 ポンドと決定された。教区委員にこの額が支払われ、Mr. John Mills らが代わりに治安役、および審問人選ばれた¹³⁵⁾。

1668年12月18日教区会。Mr. William Bradford は（他の2人と一緒に）道路清掃役に選ばれた。だが高齢と病弱、その他の理由により役職を務めるのには不適切であり、妥当な額の免除料で免除を希望した。教区会で議論のうえ、教区委員までの清掃役と第一審問人の役職は免除されることになった¹³⁶⁾。

Mr. John Bellinger は治安役に選ばれたが、1668年1月15日、教区集会に現れて、同氏が長年にわたって体調不良に悩まされており、激しい運動 violent exercise や見回りの仕事はいかなるものであれ健康に非常に有害である、とのロンドンの内科医協会の有力な医師の証明書をつけて、同氏を治安役職から妥当な免除金を支払って免除してもらおうよう、そしてより能力があり適当な人物が選ばれることを望むとする、市長の署名入りの手紙を持参した。12 ポンドの免除金を支払うことが同意され、同氏はこの額を教区委員に支払って役職を免除された¹³⁷⁾。

1667年12月、治安役に選ばれた Mr. William Spire は、先ごろ罹った病気と体調不

135) GL, MS. 3016/1, p. 621. GL, MS. 3016/2, fol. 195.

136) GL, MS. 3016/2, fol. 182v.

137) GL, MS. 3016/2, fol. 53.

良のために本人にはこの職は務められない、との旨を伝える市長からの手紙を提示した。教区会はこのを勘案して、10 ポンドの免除金でこの職を免除することに決めた¹³⁸⁾。

これらの人物が市長らに特別の繋がりがあったどうかは不明だが、わざわざ内科医協会や市長の証明書や手紙が提示されているという事実は、役職の免除がそれほど簡単なことではなかったことを物語っている。しかも病気や病弱は免除の正当な理由になったが、そのことは教区の義務から解放されることを意味したわけではなかった。健康が回復した暁には、その義務を果たすことが約束された。

1664 年 12 月 14 日教区会。Mr. Joseph Stowe は治安役と審問人の一人に選ばれた。この会合にやってきて、高齢と病気、貧困のために、教区のどちらの役職も務める能力がないことを告げた。そして教区に年齢と困窮を配慮して寛大な措置が取られることを望んだ。教区会はこのを考慮して、科料が認められるべきかどうかを討議することにした。投票の結果、科料は一切支払うことなく免除されることになった。当人は役職を引き受けることができるようになったときには、教区のためにできるかぎりの奉仕を惜しまないことを約束した¹³⁹⁾。

1670 年 12 月 17 日教区会。Mr. Isaack Hayward は治安役職に選ばれたが、水腫その他の病気にさいなまれ、健康がすぐれないために役職の免除を願い出た。しかしもし神のご加護で回復し、もっと健康状態が良くなれば、この役職を務めるとことも約束した¹⁴⁰⁾。

治安役職が敬遠されるのにはそれなりの理由があった。王国統治の末端役職として様々な業務が課せられただけでなく、この職務の遂行にはしばしば危険が伴ったからである。1693 年 12 月、Mr. Nicholas Sheffield が第一審問役を務めることを免除されたのは、彼が最近治安役を務めているときに大きな傷害を受けた *dangerously wounded* ことが理由だった¹⁴¹⁾。あるいは次のような事例もある。

1688 年 12 月 21 日の教区会。Mr. John Gatton は市参事会に請願書を提出し（それは市参事会法廷で読み上げられた）、そこで次のように申し立てた。昨年治安役職を引き受けたが、それを務めた際に、頭に大きな傷を受けてしまい、その治療におよそ 8 ポンドかかった。これを考慮して、2 年目の治安役職は免除してもらいたい。この問題が討議され、承認された¹⁴²⁾。

本人の申請がなくとも、教区会がその適格性を判断することもあった。市参事会員の

138) GL, MS. 3016/2, fol. 46.

139) GL, MS. 3016/2, fols. 15–15v.

140) GL, MS. 3016/2, fol. 72.

141) GL, MS. 3016/2, fol. 210.

142) GL, MS. 3016/2, fol. 190v.

Thomas Rawlinson 卿のもとで 12 月に開催された区集会で Henry Jones なる人物が治安役に選ばれた。しかし彼がこの任に耐えられるかどうか疑問があったようだ。卿の指示により翌年の 1 月 12 日区集会が開かれ、次のことが検討された。

Henry Jones のために、彼がこの役を務めるには不適格で不可能である理由が述べられた。……彼はうまく話せず his infirmities of speech、他人の店を通してしか通路に出られず道路に出るドアの鍵もないような住居に住んでいる。彼は妥当な額での役職免除を希望している……そこですべての役職を免除されることになった¹⁴³⁾

役職を引き受けることは地域社会の住民の義務であったが、役職の解説書に書かれているように、それを引き受ける住人には、それなりの経済的基盤と健康、適切な判断力をもつことが求められたのである。

(2) 公的義務と特権

忌避の理由として挙げられる理由として多いのは、国王への奉仕や特別の職業についていることである。それは地域の役職を免除される正当な理由となりえた。

1665 年 1 月 2 日の教区会。Mr. Francis Tyton は治安役に選ばれた。これに対して彼は国王陛下の正式従者 Gentleman waiter であるとの 1660 年 10 月 23 日付侍従長の証明書を提示し、彼があらゆる公的役職、課税から免除されていることを示した。そのため彼は一切の罰金を支払うことなく、治安役職の任務からも審問人役の任務からも免除されることになった。しかし彼は 8 ポンドを差し出し、自分の自由な自発的贈与として教区に与えた。

代わりに Mr. Mason が治安役に選ばれたが、彼は町には不在で、Jackson なる人物がやって来て、Mr. Mason はいつ町に戻れるか不確かなのでこの役職を免除されたいと希望していることを教区に知らせた¹⁴⁴⁾。一旦免除されたにもかかわらず、Mr. Tyson は 1669 年の 4 月と 7 月に、貧民監督役と救貧税徴収役に選ばれている。この時も彼はまた同様のお墨付きを提示して免除を求めた。その際にも、彼は「教区への敬意を示すべく shew his civility to the Parish」応分の免除金の支払いを行なった¹⁴⁵⁾。

1672 年に Mr. John Marshall がこの教区に住んでいるかぎり、以後すべての役職を免除されたのは、彼が国王の役人であると同時に弁護士であるからでもあった。しかし彼もまた 10 ポンドを自由意志から教区に贈った¹⁴⁶⁾。さらに 1694 年の制定法により、薬剤師も地域の役職から免除されることになった。役職に従事することで時間がとられ、病人に必要な十分な措置がとられないということがその根拠だった¹⁴⁷⁾。

143) GL, MS. 3016/2, fols 182v.

144) GL, MS. 3016/2, fol. 29.

145) GL, MS. 3016/2, fols, 56, 57.

146) GL, MS. 3016/2, fol. 98.

1699年4月12日、徴収役に選ばれた Mr. Robert Gower は、議会制定法により、薬剤師 apothecary は、いかなる役職からも免除されていると申し立てた。そこで代わりに Mr. Thomas Barsham が選ばれた。しかし彼も今年だけはこの役職を免除して欲しいと願った。妻が最近亡くなり、家族が落ち着かない、という理由からだった。討議のすえ、承認され、代わりに Mr. Thomas Robinson が選ばれた¹⁴⁸⁾。

Mr. Edmond Bolsworth は 1668 年 4 月に清掃役の一人に選ばれた。だが 1668 年 12 月 17 日の教区会に出席し、Mr. Bolsworth は、自分が国王陛下の公認従者になったことを理由に、この役職の辞退を申し出た。それに加えて彼は、刺繍を施した国王の紋章と立派な聖餐式用の机のテーブル掛けを示し、教区民への愛を表明した¹⁴⁹⁾。

役職免除が公的に認められた弁護士、医師、薬剤師、役人といった高い地位の職業は、この教区では特に多かった¹⁵⁰⁾。これら地域の上層を占める住民は、特権を通じて役職制度との関わりをもつ必要がなかったのである。とはいえ、彼らの多くは料金の代わりに、「自由意志」で、いくばくかの献金を行なうのが通例だった。それにともなって、教区や隣人に対する「愛」が表明されることもしばしばみられた。

(3) 転出

(上) で検討したように、この教区はきわめて流動性の高い地域だったが、住民の頻繁な入れ替わりは、役職制度のスムーズな運用の障害となる要因の一つだった。免除理由にはその現実を示唆する例も少なくない。そうした場合にもまた、地域の住人、隣人に対する愛や感謝がしばしば表明された。いくつか実例をあげておこう。

1665 年 6 月 25 日の教区会。教区会員の Mr. William Gamble は教区を離れ別の場所に行き暮しており、自分でこの役職をこなすことができない。そこで投票が行なわれ、時計職人の Mr. William Smith が代わりに会員役を果たすことになった¹⁵¹⁾。

1684 年 7 月 19 日の教区会。(以前に副教区委員に選ばれた) Mr. William Mart は、自分の家を人に貸して教区を出て暮らす予定であること、それゆえこの役職を務めることができない旨を隣人に告げた。しかし彼は隣人に対する敬意、貧民に対する親切から、8 ポンドを支払って主・副の教区委員を免除してもらい、さらに貧民の使用のために 40 シリングを(教区委員の) Mr. Perrin に支払った。Mr. Perrin はこの総額の会計を済ませ、それから 20 シリングをおろして隣人に酒をふるまった¹⁵²⁾。

1683 年 4 月 26 日教区会。救貧税徴収役に選ばれた Mr. Lawrance は隣人に次のこ

147) 6 & 7, Gul. & Mar. c. 4, *The Statutes of the Realm*, p. 563.

148) GL, MS. 3016/2, fol. 227.

149) GL, MS. 3016/2, fol. 52.

150) 本稿 (上)、27 ページ。

151) GL, MS. 3016/2, fol. 23v.

152) GL, MS. 3016/2, fol. 167v.

とを知らせた。彼は自分の家を貸して教区を去るつもりである。したがってこの役を免除されることを望んでいる。討議の末、認められ4ポンドの料金を払うこととされた¹⁵³⁾。

1680年12月17日教区会。Mr. Adam Pigottは清掃役に選ばれたが、彼は家を貸して教区を出ていっており、この役職を務めることができない。彼は「教区民の親切に対する感謝の印として as an acknowledgement of their kindness to him」40シリングを教区の利用のために支払った。しかし彼は翌年も隣の街区の清掃役に選ばれた。Mr. Pigottは隣人に教区から出ていくつもりであることを知らせた。隣人は彼が40シリングを支払って役職から免除してもらうのがよいと考えた。そこで Mr. Pigottは上級教区委員に40シリングを支払ったが、いぜんとしてこの教区に住み続けている。彼は教区委員までのすべての役職を免除してもらうことを望んでいる。すでに2ポンドを支払っているのに、免除金をいくらにするかが議論され、18ポンドが妥当な額と判断された。彼はこれを教区委員に支払った¹⁵⁴⁾。

事例は少ないが、市会議員のレベルでも転出したために役職を辞退する事例もある。1677年12月の区審問法廷で、市会議員に選ばれていた Mr. Thomas Cuthbertが「この教区を転出した gone out of the Parish」ことを理由に、この役職を免除された、というのがその例である¹⁵⁵⁾。

住民の移動が突き付けたもう一つの問題は、以前の居住地での役職経験をどう評価するかという問題であった。これについても決まったルールがあるわけではなかったが、次のような例もみられる。

1671年6月9日の教区会では、教区の役職をこれまで務めたことのない12人の古老教区民 12 of the Antient of the Parishioners は、教区委員以外のすべての教区役職を料料で免除されることが決定された¹⁵⁶⁾。これを受けて、7月13日の教区会では、この12名の古老教区民のうち、2名は以前に別の教区で役職を務めたことがあるとの理由で、その料料額が通例の20ポンドから各16ポンド、12ポンドに減額されることになった¹⁵⁷⁾。

1680年9月7日の教区会。Mr. Thomas Parleyは次のように要望した。この区（ファリンドン外区）の別の教区で暮らし、役職を務めてきた。したがってこの教区では教区委員まで（の役職を）免除して欲しい。これを認めてもらえば、その親切への感謝のしるしとして教区の利用のために10ギニーを寄贈する……この問題が討議され、

153) GL, MS. 3016/2, fol. 160v.

154) GL, MS. 3016/2, fols. 148v, 153v.

155) GL, MS. 3016/2, fols. 131, 203.

156) GL, MS. 3016/2, fol. 80.

157) GL, MS. 3016/2, fol. 80v.

教区委員までのすべての役職が免除されることになった¹⁵⁸⁾。

この例は、同じ区内の別の街区で役職を務めたことが、免除の理由になった¹⁵⁹⁾。しかし別の教区での役職経験が勘案されることもあった。

教区会員の Mr. Kempe が 1691 年 12 月 21 日の集会で隣人に知らせたのは次のことだった。Mr. Richard Hoare は以前住んでいたシティの教区ですべての役職を務め、市議員でもあった。したがっていかなる区の役職に就く義務もない。その代わり、教区の利用のために 10 ギニーを贈ることを本人が申し出た。討議の結果、申し出は承認された¹⁶⁰⁾。

(4) 仕事

転出や不在という事態は様々な動機から起こりえた。例えば、都市の環境の悪さが田舎への退去を余儀なくさせることもあった。教区会委員に選ばれた Mr. Gibbon Bagnal が、1699 年 4 月 12 日の教区会で申し立てたのは、健康がすぐれず、田舎に引きこもらねばならないため、この役職は引き受けられないことだった。彼はすでにこの役職を務めているが、教区に対する敬意を表すために、8 ポンド支払った¹⁶¹⁾。

それ以上に、移動や役職辞退に関わりがあったのは、仕事や経済的事情だった。繁栄するロンドンの経済環境のもとで生き抜くためには、様々なコストとリスクを覚悟せねばならなかった。役職辞退の理由として、そうした仕事上の困難や失敗が理由にあげられることもある。いくつかの例をあげてみよう。

Mr. Roger Lambert は役職を引き受けられない理由を教区民に次のように述べた。現在多くの緊急の事態を抱えており、そのため仕事がすっかりお座なりになっている。奉公人の一人は最近逃げてしまったし、もう一人は田舎で病気に罹ってしまった。彼は市議員であり、本来ならこの役職（教区委員）を免除してもらってしかるべきだが、教区に自由に自発的に 6 ポンドを提供したい。教区会はこの申し出を受け入れて、彼を教区委員と第一審問人の役職から免除することになった¹⁶²⁾。

1681 年 4 月 6 日の教区会。Mr. Joseph Drake は教区委員に選ばれた。しかし Mr. Saunders によれば、Mr. Drake は彼の商売を止めるつもりようだし、その他にも理由があって、教区委員の役職を免除してもらうことを望んでいる。8 ポンドを支払って免除されるべきである¹⁶³⁾。

158) GL, MS. 3016/2, fol. 147.

159) 他の同様の例として、GL, MS. 3016/2, fols. 126, 203, 204.

160) GL, MS. 3016/2, fol. 203.

161) GL, MS. 3016/2, fol. 227.

162) GL, MS. 3016/2, fol. 8.

163) GL, MS. 3016/2, fol. 150.

1669年4月14日の教区会。Mr. Aleyn Readは次の副教区委員に指名された。しかし現在、地方に滞在している。そのため彼の「愛すべき友人である教区民 his Loving friendes the Parishioners」に宛てた手紙が Mr. Thomson により代読された。その中で、彼はこの役職を引き受けられないこと、教区への尊敬 his Respects to the Parish をいくばくかの科料で支払う意思のあることを教区の住人が了解してくれるものと確信している、と述べた¹⁶⁴⁾。それにもかかわらず、Mr. Read は同年の4月24日には教区委員に指名された。これについても7月29日の教区会で、Mr. Read の代理人が手紙を読み、「もし教区が彼に自由に事業をさせてくれるなら if the parish would leave the business freely to himself」妥当な額を支払って教区民に対する尊敬の念を示すつもりだし、正直にジェントルマンにふさわしく振る舞うつもりであること、そのために自由に自発的に教区に10ポンドを贈ることを申し出た¹⁶⁵⁾。

この最後ケースでは、教区への義務と自分の経済活動、いわば公と私の間の軋轢が率直に語られている。しかし第6図が示唆するように、仕事上の困難や多忙さが役職辞退の理由とされる例は、そうした状況は常時存在したと思われるにもかかわらず、予想外に少数しか見いだせない。私的な理由のために役職という地域社会の公務を回避することは、教区委員の間では、当然のこととしては受け入れられてはいなかったといってもよい。

結論と展望

17世紀後半の聖ダNSTAN教区は、人口規模の点でも、社会構造の点でも、市壁内の小規模な地域社会とはかなり異なった特徴をもっていた。ウェストエンドに位置するこの地域には、ジェントリと、それに加えて役人や専門職従事者が多く住み、彼らがこの地域の最も富裕な階層を構成していた。しかしこれらの人々は、免除特権にも守られて、この地域の役職を引き受けることはほとんどなかった。この階層の多くが単身者であったり間借り人として暮らしていたことにも、その一因があったと考えられる。したがって、この地域の役職制度を担ったのは、これらの最上層を除く独立の世帯主、つまりは中位階層の商工業者たちであった。

これらの階層の内部の社会構成も多様だった。地域の役職者の就任状況を調べてみると、職業の面でも経済的水準の点でもかなり広い層の住人が、役職制度に関わりをもっていたことがわかる。しかしその関わり方には大きな違いがあった。過半数の住民が、少なくともこの地域では、一度だけの経験で終わるのに対して、何度にもわたってこれを引き受ける少数の住人もいた。役職の位階の下から始め、しだいに「名譽の階梯」を上る役職

164) GL, MS. 3016/2, fols 55v-56.

165) GL, MS. 3016/2, fol. 57.

に経あがって、市会議員に至るという経歴は、明らかに通例というよりも例外であった。「古老住民」というような呼び名はあったにせよ、地域社会の上層役職の市会議員や教区委員の例で見ても、長期間にわたって、あるいは何世代にもわたって、この地域の役職を引き受けるような家族や世帯主はまれだった。地域に根を張った古い有力家族が、地域の役職と政治を差配することで、地域の連続性と安定性が保持される、とする仮説は、このような流動性の高い社会ではかならずしも当てはまらない。間借り人の多さからも予測されるように、この地域はまた人の入れ替わりもきわめて激しい地域だった。

就任状況についての分析は、この地域の役職担当者の調達と交替がかならずしも円滑に進んでいなかったことを示す。役職忌避の事例もまた、この結論を補強する。免除の申請者はしばしば高齢者だったが、彼らが治安役などの比較的下級の役職に選ばれ免除を申請していることは、役職の位階がかならずしも年齢の順序に従うものではなかったことを示唆する。忌避の事例は大幅に増えたとはいえないが、とくに清掃役、治安役職はもっとも忌避されることの多い役職だった。この二つは16、17世紀の間にその職務が大幅に広がり、おそらく社会的評価も向上した役職だった。下層の商工業者が支払うには大きすぎる免除金額がそれを間接的に証明する。役職を実際に務めたものと科料で免除されたものが区別されずに教区会のメンバーとして承認されたことに見られるように、金銭による役職の免除や代行はこの教区でもめずらしいものではなくなっていった。だが他方で、役職辞退のための諸々の申請理由は、役職の担当がなお、この地域社会の住民にとってけっしてないがしろにできない近隣社会の義務であったことも明らかにする。辞退の理由は教区会の出席者が認めうるほど十分正統なものでなければならなかったし、免除された者たちはしばしば教区や隣人への愛や尊敬を表明した。それが免除を受けるための慣例的常套句にすぎなかったとしても、役職は地域住人が担うべきものとの観念は、規範としてはなお共有されていたといってよからう。教区会は役職経験者や免除経験者だけに限られ、封鎖的な性格を強めていった。だが役職免除に関する教区会の記録は、その判断がかならずしも強制的で独断的なものではなく、本人や隣人関係の状況を配慮して下されたことをも示している。住民の無償の奉仕により支えられた役職制度が存続しうるかどうかは、結局のところ、隣人関係の強さと持続性にかかっていたといえる。

近世ロンドン史研究の難しさの一つは、その地域的多様性にある。一つの地域についてどれほど綿密な研究を行なったとしても、そこから近世ロンドンの、ましてやイギリス近世都市の一般的な特徴が自ずと浮かび上がってくるわけではない。この点を十分留意したうえで、最後に、17世紀後半の地域社会についてのこの事例研究から、18世紀をも展望するより一般的な論点を三つだけ指摘しておこう。

第一は、ロンドン地域社会の高い流動性もつ別の側面である。とりわけ大火以後、地域社会の構成員の入れ替わりはさらに頻繁になった。それは地域の役職制度の円滑な機能

に対する障害となったはずである。役職忌避の広がりにはさらにこの傾向を加速した。しかし役職制度そのものは、この状況に適応しつつ18世紀を通じて存続し続けた。この制度を支える地域の隣人関係も、大都市の匿名性のなかに解消してしまったわけではなかった。とはいえ、ロンドンのような流動性の高い地域社会における隣人関係は、けっして住民を一義的に地域に縛り付けるような強い紐帯ではなかった。その一方で——M. グラノヴェッターの用語を借りるなら——この「弱い紐帯」は、地域社会を超えたより広い社会的ネットワークにロンドンの住民を繋ぐ「強さ」を担保した、と考えてみることもできる。

第二に、注目しておくべきは治安役と清掃役の二つの役職である。二つは社会的に高い評価を受けるような役職ではなかったが、17世紀の後半には、教区委員と並んで、地域社会の運営にとって欠くことのできない役割を担うことになった。その背景には、一方で都市化の進展に伴うごみや下水の処理、道路管理、交通渋滞、治安維持、夜間の監視などの問題の深刻化、他方でそれに対処することを目的とする王政復古期以後の一連の制定法の成立があった。これら地域の役職の重要性の高まりは要するに、法的にも現実にも、住民に提供すべき「公共サービス」の量と範囲が拡大したことを反映するものだった。それらサービスのなかには、地域住民の奉仕だけでは十分に提供できないものもあった。それらを誰が、どのように——資金の問題も含めて——提供するかという問題は、役職制度の現実とその変容を解明する重要な鍵の一つと考えられる。

第三に、本稿ではほとんど触れられなかったが、市参事会に対する市会と市会議員の優位という事実が含意するロンドンの政治史の問題がある。市議会議員は豊かな住民だけが就ける役職であったが、地域に長く住む住民しかねない役職ではなかった。とはいえ市参事会員と異なって、市会議員は地域（区、街区）から年々選ばれる役職者だった。聖ダNSTAN教区の教区会の例で見てきたように、地域の集まりに参加できるのは実質的に制限されていたし、市会議員は同一人が何年も選ばれるのがむしろ通例だった。しかし本稿の例はまた、教区会での決定が、出席者の論議や選挙、投票（その詳細は不明だが）を経てなされたことも明らかにしている。この教区にかぎらず、それはロンドンの多くの地域社会でみられた意思決定の通常のかたちだった。市会議員のような役職には、経済的に候補者が限られている点からしても、選挙のもつ実質的意義や公平性には大きな限界があっただろう。だが、その選出が住民の意思を全く無視して行われたとも考えにくい。とすれば、区や街区での市会議員の選出を通じて地域住民がロンドン市政に及ぼす影響力は——市参事会法廷が市政の中枢を独占していた時代に比べれば——高まったはずである。党派抗争時代のロンドンを考えるとき、それはけっして小さな問題ではないのである。

（本稿は「学術研究助成基金助成金、基盤研究（C）」による研究成果の一部である。）